

大豆の病害虫防除～高品質多収のために～

大豆の病害虫防除は、多くの場合大豆の生育ステージを基準にして防除適期を決定します。開花期、着莢期など生育の進み具合をよく確認して適期の防除に努めましょう。また、最近は大豆生育期後半のハスモンヨトウの発生がよくみられていますので、特に注意が必要です。

1. 紫斑病、カメムシ類、シンクイムシ類の防除

これらの病害虫は、紫斑病の防除を中心として同時防除が可能です。2回の防除を基本としますが、年によって害虫の多発が懸念される場合は3回目の防除が必要となります。下記ポイントの防除時期を参考に適切で効果の高い防除を行いましょう。

- 1回目…開花後 10～15 日目(着莢期)
- 2回目…1回目の約 10 日後
- 3回目…2回目の約 10 日後(発生が多いとき。)

(1)紫斑病

大豆の表面が紫色になる病気で、多発すると等級が下がる原因となります。紫斑粒の選粒は機械ではできないため、この紫斑病の防除を怠ると収穫後の選別に多大な労力を必要とします。

(2)シンクイムシ類

莢に産卵して、幼虫が莢の中に侵入し子実を食害します。子実への直接加害のため、多発すると大きな減収要因となります。

シンクイムシ類の中には老熟した幼虫で土中で越冬する種類もいますので、連作ほ場では特に注意が必要です。

(3)カメムシ類

莢が付き始めると飛来して、子実を直接加害します。汚損粒、被害粒等の発生原因となり収量・品質の低下要因となります。

2. ハスモンヨトウの防除

ハスモンヨトウは莢が太り始める8月下旬頃から目につくようになり、9月から10月にかけて徐々に増殖し、そのまま放っておくと葉を食い尽くし、甚大な被害をもたらすこともあります。また、幼虫が大きくなってからでは薬剤の効果が著しく劣りますので、発生初期の防除が必須です。

(1)耕種的防除

発生初期は若齢幼虫が上位葉に集団で食害する習性があります。この被害葉のことを白化葉と呼

びますが、発見し次第これを摘んで、ほ場外へ持ち出し処分しましょう。早めに除去することが重要で、意外と高い防除効果があります。放っておくと幼虫は成長とともに分散して、大きな被害をもたらします。

(2)化学的防除(薬剤散布)

白化葉が見え始める頃が薬剤による防除適期でもあります。前述のとおり幼虫の成長とともに薬剤による防除効果が低下するので注意が必要です。早期防除に心掛けましょう。防除適期を逸して、中齢幼虫や老齢幼虫が増えてしまった場合は、オキサダイアジノン系、または、IGR剤による防除が必要となります。また、発生量が多い場合は2回散布の必要があります。この場合は、抵抗性の発現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用や効果が低下してきた薬剤の使用は避けましょう。薬剤散布後はその効果を確認するとともに、その後の幼虫の発生に注意しましょう。

農薬取締法の改正で、無登録農薬の使用や農薬使用基準の違反については、使用者も罰則が適用されます。農薬は、袋やラベルをよく確認して登録条件に従い使用しましょう。

[\(戻る\)](#)